

# 就学に関する相談とAくんの成長

勢一 利江

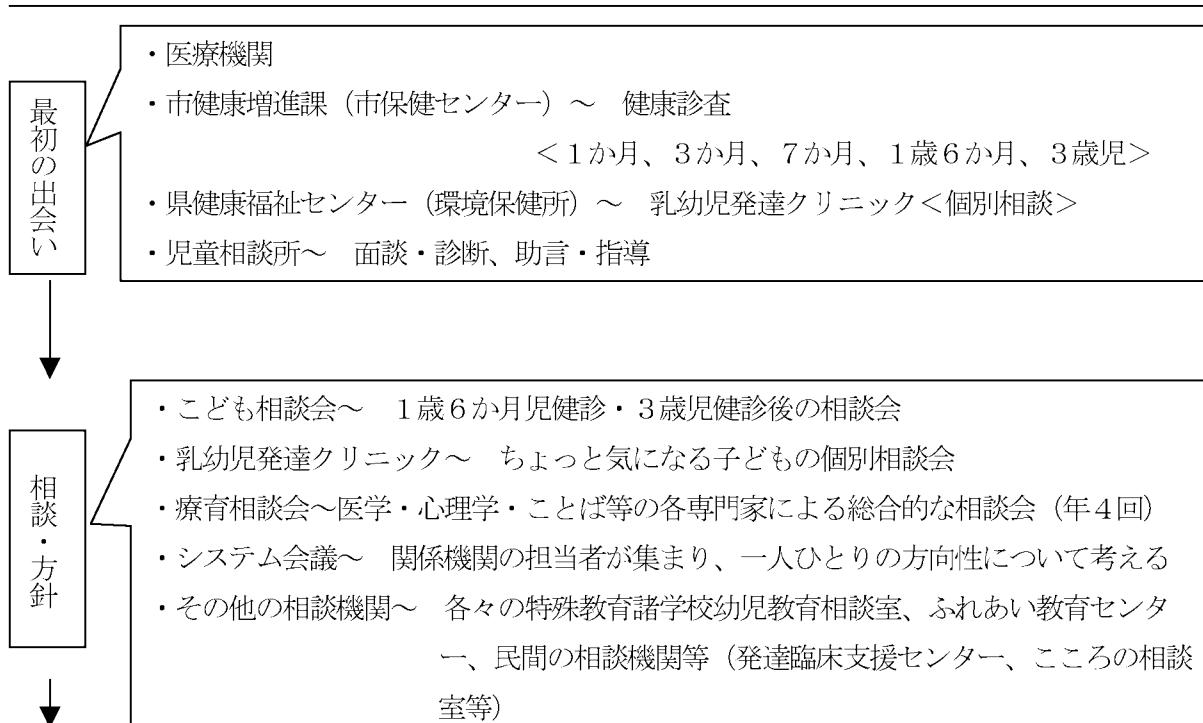
**要旨：**平成12年度から実施されている盲・聾・養護学校幼稚部教育要領総則には、「特に留意する事項」の1つとして、「障害のある乳幼児やその保護者に対して早期からの教育相談を行うこと」が明記されている。近年は、子どもへの支援と同時に保護者への支援も大きな意味をもつ。本論文では、相談・指導に辿り着くまで、指導の実際、保護者へのかかわり（主に就学に関する相談）などについて報告し、「幼児ことばの教室」における就学に関する相談と保護者支援について、考察した。

**見出し語：**保護者支援、子育て支援、就学に関する相談、情報提供、他機関との連携

## I. 幼児ことばの教室に辿り着くまで～つながり＜連携＞を大切に～

### 1. 発達が気になる子どもの相談から療育へのながれ

本市における早期療育の流れを図1に示した。発達が気になる子どもとの最初の出会いの場は、医療機関・市健康増進課・県健康福祉センター・児童相談所等である。この出会いの場から、相談の場へとつながっていく。相談の場では、システム会議を開催し、子どもの対応の方向性について検討して方針を決め、指導や療育の場へとつなげていく。「幼児ことばの教室」は、この流れの中で指導・療育機関の一つとして、市の療育システムに組み込まれている。



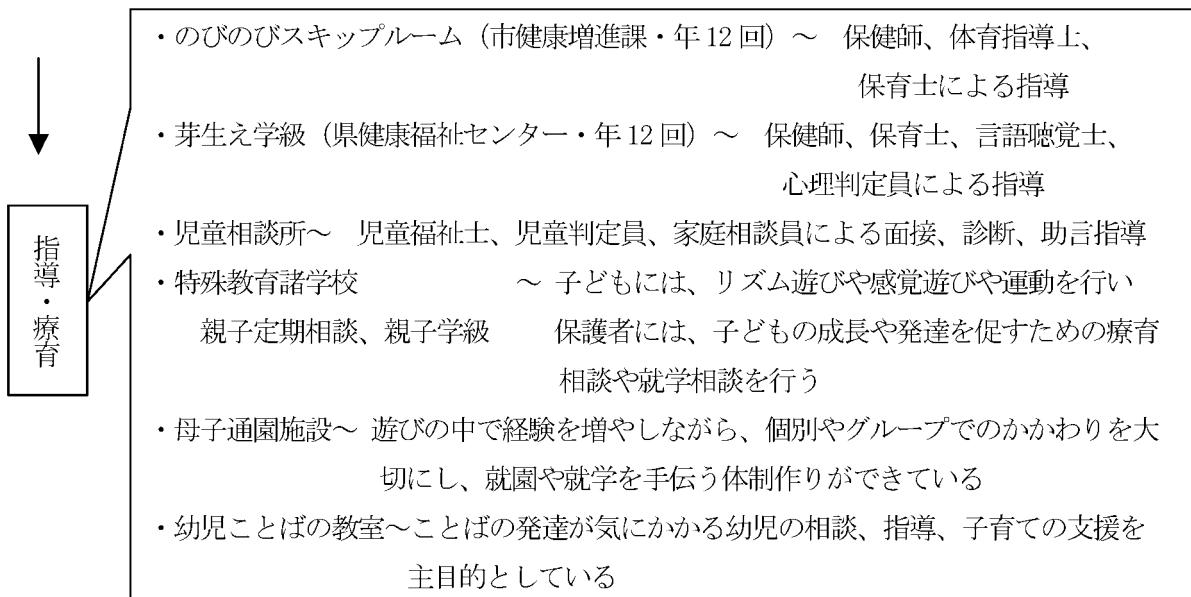


図1 相談から療育の流れ（障害者福祉ネットワーク会議相談体制検討委員会編集：『ムーヴ』より）

## 2. 幼児ことばの教室での受け止め

「幼児ことばの教室」は上述したように市の療育システムに組み込まれており、教室へは、幼稚園、保育園、医療機関、保健センター、健康福祉センター、児童相談所等のさまざまな関係機関からの紹介がある。また、保護者から直接、電話での申し込みもある。この相談申し込みを受けて「幼児ことばの教室」では図2のような流れで、進めていく。

まず、「幼児ことばの教室」では教育相談として、保護者との面接と子どもの行動観察を行う。次に、ケース会議を開き、相談結果について担当者間で検討する。その結果を入級判断委員会において報告し、通級の必要性について審議する。審議結果としては、「通級」「相談継続」（通級ではないが、相談後のフォローとして定期的に様子を見る場合）「相談終了」（指導やフォローの必要性がない場合）「他機関への紹介」のいずれかの判断がなされる。

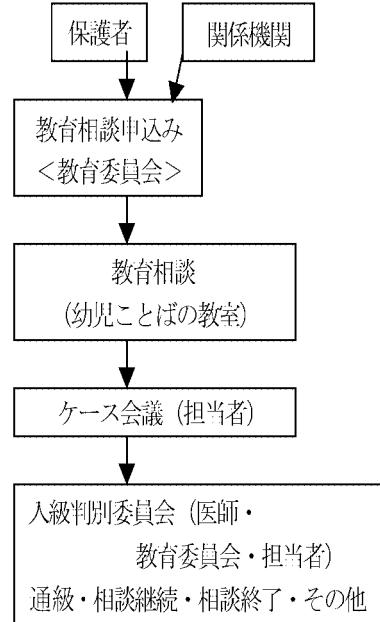


図2 幼児ことばの教室の受け入れ

## II. 幼児ことばの教室について

### 1. なぜ、幼児ことばの教室に通うのか？

図1にも示したように、本市には、芽生え学級や母子通園施設があるが、なぜ「幼児ことばの教室」に相談に来たのかを教育相談時、母親に聞いている。その多くは、以下のような回答であった。

- ・個別指導を受けたい
- ・相談、指導に関する費用が無料
- ・小学校の中にがあるので、行きやすい
- ・就学に関する情報提供や相談が受けられる
- ・子どもの指導のみならず、親のフォローがしてもらえる
- ・週1回の指導が受けられる
- ・病院へ行くと「何か言われるのではないか」と言う不安がある
- ・あまり気にならないのに、周りの人（保健師や園の担任）から行くように言われた

これらの回答から、個別指導を受けたい、情報提供が受けられる、子どもの指導だけでなく保護者の悩みを聞いてもらいフォローもしてもらえる等の観点で、「幼児ことばの教室」に、来ていることが分かる。

## 2. 幼児ことばの教室における保護者支援の内容

「幼児ことばの教室」における保護者支援の内容は、一般的には「子育て支援」と「就学に関する相談」の二つに大きく分けられる。

### (1) 子育て支援

「子育てを一人で悩まないで。何でも話し、相談しましょう」日々の子育ての悩みを聞いたり、ちょっとしたアドバイスをしたり、「子育ては決して楽じやありませんよ、でもしっかり楽しんでねっ！」と、エールを送りながら、保護者の気持ちに寄り添い、心を込めたかかわりを大切にする。

具体的には、連絡ノートの活用（保護者・園・担当者間で記入し合う）、指導時の話し合い、学習会（レタスの会）への参加を勧める等の活動を行っている。

### (2) 就学に関する相談

「小学校はどこにしましょうか・・・」という相談に対して、通常学級・障害児学級・通級指導教室（児童部）・特殊教育諸学校に関する情報を提供し、就学先はいくつもあるので、障害の状態によって学校を決めるのではなく、子どもに合った（子どもが生き生き過ごせるところ）学校に決めるよう話をしている。そのために、体験入学を勧めている。担当者は、市教育委員会指導主事や在籍園との連携をとり、子どもにとってどのような教育環境が適しているのかという視点をもって相談を行う。また、学校の見学や先輩のお母さんからの話を聞くことを勧め、最終的に両親の気持ちをまとめるように助言している。

## 3. 幼児ことばの教室における保護者支援で配慮していること

「幼児ことばの教室」の保護者に相談に訪れる子どもの保護者は、我が子の実態がどのようなものであるのかを十分に理解できずにいることが多い。そこでまず、保護者の話を徹底的に聞くことにしている。担当者が「聞き役」に徹することで、保護者を受け止めることからスタートしている。

そして、「ちょっと話して帰りませんか？」というように気楽に話せる雰囲気を作り、保護者が担当者にいつでも、どこでも、気軽に声をかけられるように心がけている。なかなか本音を話してくれない保護者に対しては、気長に、焦らず、こつこつとかわるようにしている。

また、お母さんの「ここがいい！」を見つけて誉め、子育てに自信をもたせるかわり（ことばかけ）をするようにしている。特に、我が子の障害に自分の責任を感じている保護者に対しては、このかわりは重要であると考えている。そして、「相談してよかったです」「また相談にのってください」と言われるような信頼関係を維持していくよう配慮している。

### III. 就学に関する相談の事例

ここでは「幼児ことばの教室」における就学に関する相談において、就学先の選択を保護者が2か月にわたり悩んだ経過を紹介する。

事例Aくんは、「幼児ことばの教室」が設置された小学校（以下「本校」と記す）の校区に在住している。構音障害があるため、「幼児ことばの教室」に5歳から通った。就学にあたり、両親が通常学級か障害児学級かの判断に迷い、在籍園・指導主事・「幼児ことばの教室」担当者（筆者）と相談を継続しながら、最終的に障害児学級在籍を選択した。通常学級で生活できるかどうか不安が募る中で、本校障害児学級半日体験入学でのAくんの楽しそうに活動する姿が選択の決め手となったようだ。

#### 1. 初回教育相談時の様子

##### (1) 生育歴

1歳6か月健診や3歳児健診でことばの遅れを指摘される。療育相談会へ紹介され出向いた結果、「遅れはないと思われるが、ことばの育ちが遅いタイプの子どもだろう」と言われ、早めに集団生活を経験させた方がいいという助言により、年少から幼稚園に入園し、現在に至る。母親の持論で、「子どもは一人で寝るものだ」と思い込んでいたので、赤ちゃんの頃から添い寝をしてやらなかった。絵本の読み聞かせもほとんどしなかった。「躊躇は厳しくするもの」だと思っている。家族構成は、両親と姉（小2）と本児の4人家族である。

##### (2) 諸検査の結果

###### ①遠城寺式・乳幼児分析的発達検査：暦年齢5歳1ヶ月時実施

移動運動 3 : 9	手の運動 3 : 0	基本的習慣 4 : 8
対人関係 3 : 10	発語 2 : 10	言語理解 3 : 10

###### ②田研・田中ビネー知能検査：暦年齢5歳11ヶ月時実施

精神年齢 3 : 9	知能指数 63
------------	---------

##### (3) 本児の実態

###### ①幼稚園での様子

3歳児から入園し、日々の園生活を楽しんでいる。女児と室内でカルタや折り紙をして遊ぶことを好む。戸外でサッカーやうずまきジャンケンをしたりして遊ぶことも好むが、順番が待てなかったり、勝敗にこだわったりして、大泣きをすることが頻繁にある。会話の様子は、不明瞭な発音のため聞き取りにくいことが多く、会話でのやりとりが長続きしない。興奮すると早口になり、矢継ぎ早に話すため、周囲の者は口をはさめない状態にある。話を聞くことが不得手で、話し手を見ないことが多く、ゴソゴソしたり、立ち歩いたり、終始落ち着きがない。すすんで行動することは少ないが、友だちの行動を見たりまねたりすることで、皆と同じ活動は可能である。

### ②家庭での様子

姉とかかわって遊ぶことはあるが、ほとんどはTVゲーム等で遊ぶことが多い。母親が就労しているため、日中留守番をすることがあるが、寂しがることはなく、一人でゲームをして待つことに慣れている。そのためか、ゲームの内容に詳しく、そのことになると、目を輝かせて、まくし立てるように話す。偏食がひどく、鼻かみが苦手である。

### ③ことばの教室での様子

教師とかかわって遊ぶことを喜ぶ。思うようにならないと（遊び方が分からなかったり、ゲームに負けたり、遊びに失敗したりする）大泣きをして、怒鳴り散らしたり相手を叩いたりすることがある。

物の名称は概ね分かるが、音節数が多くなると（4音節以上）音が入れ替わったり、誤っている。集中力に欠けており、次々と遊びが変わったり、すぐ飽きたりする。話を聞く時、視点が定まらず、指示のとおりに行動できなかったりする。文字を書いたり読んだりができる反面、数唱と実数の一致は難しい。質問への返答が分からないと、質問をそのまま繰り返し話すことが多い。

## 2. 指導方針

### (1) 指導のねらい

ことばに対して興味や関心をもち、喜んで話したり聞いたりしようとすることをねらいとして、以下の3点を設定した。

- ・いろいろな人や物などとかかわりをもち、安定した情緒の下で行動する
- ・指示を聞きながら楽しく行動する
- ・落ち着いて会話のやりとりをする

### (2) 活動内容

上記のねらいを達成するために以下のような活動を行うことにした。

- ・粗大運動：体力遊び（走る・両足跳び・片足跳び・歩く・おすわり競争）、フープ遊び、ボール遊び
- ・手先を使った遊び：パズル、ひもとおし、ペグ刺し、シール貼り

- ・ことば遊び：なかま集め（色や種類）、鳴きまねごっこ、なぞなぞ、しりとり、抜け字探し、数遊び（数唱と実数）、絵本タイム
- ・母子遊び：ゲーム遊び、絵本の読み聞かせ身体を使ってージャンケン〔足と手で〕、ボウリング、輪投げ、玉入れカードを使って一カルタ、トランプ、ドミノカード、マッチングカード

### 3. 就学に関する相談の経過

#### (1) 1回目相談 10月初旬

就学時健診で耳鼻科健診の際、大暴れして逃げ回り、医師から「こんな子は初めて」と言われた。就学時健診後その時の様子を話して、「この子1年生になれるやろうか…」と、母親は、いつになく暗い表情で話した。母親は姉と同じように通常学級の入学を当然のことと思っていた。しかし、会話でのやりとりが難しく、的を射た内容の返答にならないことが多いので「授業についていけるかどうか…」という不安が日頃から募っていた。そこに就学時健診のトラブルである。その頃から、両親（特に母親）の「通常学級で生活できるかどうか不安」と、就学への悩みが始めた。

この心配に対して、担当者は、幼稚園にも相談してみてはどうかと、話した。

#### (2) 2回目相談 10月中旬

両親が「通常学級での生活に不安」ということを園長に伝えると、「通常学級以外にどこがあるのか！」と、不安を一気につっぱねた。「Aくんみたいな1年生は他にもたくさんいるのだから、よけいなことは考えなくてよろしい」と、相談する状況を拒んだ。この園の対応に保護者の思いは、複雑であった。「通常学級で大丈夫だろうか」という思いを行ったり来たりしている状況がうかがわれた。この思いの揺れをすぐに解決することは難しいが、担当者は保護者の気持ちを理解しているという姿勢を示した。

#### (3) 3回目相談 10月下旬

不安を膨らませながら、途方に暮れた表情で相談する母親の気持ちを尊重し、とにかく話を聞いた。

就学先についての相談は、慎重に対応しなければいけないと思った。しかし、相談にのりながら、自分だけの力で両親を安心させながら就学に関する相談を継続することは難しいと思い、指導主事に相談することを母親に提案し、了解を得た。

そして指導主事から、在籍園に就学指導委員会への資料を提出するように促してもらった。

#### (4) 4回目相談 11月上旬

本教室に両親が来室し、今後の就学に関する相談の進め方について話し合った。

まず、両親の思いを聞き、最近のAくんの家庭や園での最近の生活の様子を聞いた。その後、「どんな学校があるのか」「どのようにして学校は決まるのか」等、学校紹介のパンフレットを見たりして、就学に関しての情報を提供した。

本教室での相談終了後、両親で指導主事に相談を行った。指導主事は、両親の不安や悩みを受け止めてくれ、「皆でAくんの就学を考えていきましょう」と、今後の就学に関する相談の協力を約束してくれた。就学指導委員会で検討するために、Aくんの実態について、在籍園に資料の提出を促した。

#### (5) 5回目相談 11月中旬

本校障害児学級への半日体験入学をする。朝の活動から参加し、体育、音楽、課題別学習等の時間を過ごし、児童と会話を弾ませながら、楽しく授業に参加していた。帰り間際には、「もうあしたから、がっこうきていいん?」と、学校への期待が大きく膨らんでいた。母親は体験の様子をビデオに撮り、「喜んで活動しているAくんの様子を父親を見てもらい、二人で相談してみます」と、真剣な表情で語っていた。「喜んでいるAくんの姿を見ると、無理をさせたくない」「Aくんに合ったペースでかかわってもらえるのではないだろうか」と言う両親の思いから、体験入学が就学先の判断の決め手となった。

体験入学の申込みは、在籍園から本校へ電話連絡があったが、保護者が園長にその申し出をして、2日後であった。園としては、体験入学には反対であった。

#### (6) 6回目相談 12月上旬

母親より、本校障害児学級への入学を希望するとの連絡を受ける。母親の表情は晴れ晴れしく、「決まってホッとした」と、安堵していた。早速、指導主事にその旨を報告する。

### 4. 就学準備状況

#### ①Aくんの様子

3学期には、障害児学級受け入れを前提として、毎週の幼稚部での指導時間のうち20分程度を障害児学級の体育の時間に交流させてもらい、ミニサッカーやボウリング、アスレチックなどに児童や担任と楽しく参加している。

2月に1日入学をすませ、「もう1ねんせいしてもいいん?」「つくえとランドセル、ばあちゃんにかけてもらったよ」「きのうつくえでねえちゃんとべんきょうした。ポケモンかいた」と、1年生になる期待が少しづつ膨らみ始めた。体育交流の時間には、目を輝かせながら、生き生きとした表情で活動している。時には、1年生を負かすほどの力を發揮するなど、頼もしい姿が見られた。

#### ②保護者への対応

「無理をさせたくない」「楽しく毎日通学してほしい」「子どものリズムに合ったゆったりした学級を選びたい」等の理由で、障害児学級を選択した母親の表情は穏やかである。反面、「あれもできていない、これも分かっていない」という、焦りが出てきた。担当者は、母親の焦りを受け止めながら、「こんないいこともありますよ」「これができるようになりましたね」「長い目で見守っていきましょう」と、話した。

## 5. 就学後のAくんの様子

### (1) 入学時の様子

1年生になれた嬉しさで、満面の笑顔で落ち着いて入学式に参加することができたようだ。入学式当日、「せんせいみてえ、1ねんせいになったんよ。こんどかばんみせちゃろうかあ」と母親と一緒に挨拶に来てくれた。母子共に晴れ晴れした表情だったので、安堵した。

### (2) 障害児学級での様子

#### ①学習時

- ・何事にも意欲的に取り組んでいるが、順番や勝敗にこだわるあまり、友達と口げんかになつたり、大泣きをしたりすることがある。
- ・字を書いたり読んだりすることにはゆっくりではあるが、喜んで取り組んでいる。
- ・文章を読んで理解しながら設問に答えることは難しいようである。

#### ②休み時間

- ・同学年の友達のみならず、上級生の男児と自転車に乗ったり、ビデオを見たりして楽しく過ごしている。
- ・教師が何かしていると寄って来て、「なにしようん」「てつだおつかあ」と、誰にでも気軽に声をかけ、かかわっている。

#### ③給食時

- ・偏食が多いため、食べられる献立は数少ないが、量を少なめにしたり、時間をかけたりすれば、徐々に食べられるようになった（配膳された量が気に入らず、自分で食べられる量にしている～減らしすぎて、一口しかない時もある）。
- ・残さず食べられた時には、「ぜんぶたべたあ」と、嬉しそうに教師に言い回ったり、母親に話したりしている。

#### ④掃除時間

- ・時間内は一生懸命取り組んでおり、床を拭く要領を得ている。
- ・ゴミを集めに行くと、「ありがとう」「おせわになりました」と、声をかけてくれる。

### (3) 交流学級での様子（担任は、昨年度の姉の担任）

- ・入学当初は、交流学級に行くことを嫌がっていたが、慣れると喜んで行き始める。姉の担任だったということもあり、親しみを感じてはいたが、先生に慣れるまでに時間がかかった。2学期には、校内で出会うと先生の名前を呼んだり、抱きついたりしている。
- ・人気者で、友達（特に女児）から「Aくんかわいい」と、言われている。
- ・毎回の交流は喜んで行っているが、時間が長かったり、内容が難しかったりすると、立ち歩いて担任の所へ行ったり、便所や水を飲みに行こうとする。

- ・交流状況は、金曜日を除き、毎日2時間である。

#### (4) 家庭での様子

- ・学校であったことをよく母親に話しており、母親もその話から学校の様子が分かるようだ。
- ・宿題に喜んで取り組んでいるが、TVやビデオに気を取られ、やり終えるまで時間がかかる。
- ・登下校は姉と一緒に登下校したり、児童クラブから一人で帰ったりもできるようになった。自宅近くからAくんに見つからぬよう、母親がこっそり見ていることもあるが、交通ルールを守りながら歩いている姿に安堵しているようだ。
- ・姉やその友達と遊ぶことを喜んでいるが、相変わらずビデオやゲームに凝っている。

#### (5) 両親の思い

- ・本児が喜んで毎日通学していることを喜んでいる。
- ・障害児学級担任との連絡ノートのやりとりで不安や心配事、相談事を書いている。それに対して、担任からアドバイスを受けることで安心している。
- ・いざなは通常学級へ移籍したいと考えている。
- ・母親は就労しているが、学校行事や障害児学級での保護者同士の親睦会などへも積極的に参加し、保護者同士の交流も深めている。

#### (6) 今後の生活に向けて

- ・本児は慣れるまでに時間がかかるが、様子を見守りながら通常学級の活動に参加したり、取り組んだりする時間や機会を増やしていくことが大切ではないだろうか。
- ・「無理をさせたくない」「楽しく毎日通学してほしい」「子どものリズムに合ったゆったりした学級を選びたい」等の理由で本学級に就学した。今のところ、うまく適応しているが、ゆくゆくは、通常学級に移籍したいという目標から、生活の様子を見ながら、交流の時間を徐々に増やしていくことが望ましいと思われる。
- ・自分にはクラスが2つある、先生が2人いるという嬉しさや安心感から、Aくんにとって心が許せ、気が抜ける（やすらぐ）場、自分を存分発揮できる場という、双方のバランスがうまく保てるように配慮していくことが重要ではないか。

### 6. 事例のまとめと課題

本事例は、就学時健診後の不安から始まり、それが徐々に膨らみ、相談を通してそれが軽減し、最後には安堵へと変わっていった事例である。相談を開始してから2か月で就学先が決まった。両親の「無理をさせたくない」「楽しく毎日通学してほしい」「子どものリズムに合ったゆったりした学級を選びたい」等の理由で、障害児学級を選んだ結果、スタートは順調で大きな混乱を見せることなく、落ち着いた日々を過ごしている。障害児学級で自分のペースを尊重してもらい、通常学級との交流で刺激を受けながら、いろいろな活動に興味関心を示しているようである。生活面は安定していると思われる所以、今後、通常学級で生活していくために、学習面での対応が

どこまでできるかが、大きな課題であると思われる。

保護者と相談を継続する中で、筆者は、Aくんや保護者の心理をしっかりと受け止める対応が必要であると痛感させられた。そのためには、筆者自身が障害に関する知識を持ち、子どもをよく理解し、ロールプレイ等で相談場面の経験をするなどして、対応のあり方を研修してみたいという意欲もわいてきた。

また、今回の就学相談では、各校種の特徴や実情について、指導主事から具体的に分かりやすく情報提供がなされた。入学についての判断は、保護者の意図もくんで、最終的には教育委員会が行うが、保護者の十分な理解が得られないこともある。のために、保護者への適切な情報提供は欠かせないが、いかに保護者的心情を理解しながら相談を進めていくかがとても大切である。

#### IV. おわりに

就学に関する相談の保護者の満足度は、教育相談的対応と情報の提供が密接に関係している。そのため、日頃、次のようなことに配慮する必要があると考えられる。①保護者が早い時期に小学校・特殊教育諸学校の実情を把握し、理解するために、担当者は学校等の情報を提供していくこと、②子どもの実態や保護者的心情に配慮しながら、子どもにとって適切な就学先を決めるためにどのような観点で考えていくことが重要であることを話し合っていくこと、③就学先の決定に学校見学は大切であり、学校見学や就学に関する相談へは、できるだけ両親で参加してもらうこと等が考えられる。

これらの配慮を行うために、関係機関のネットワークを構築すること、相談担当者の資質の向上に努めることが必要である。

また、軽度の発達障害の子どもは、保育園や幼稚園で気が付かれ、相談のきっかけになることが多いので、各園に理解啓発をすすめていくことも重要である。

就学に関する相談では、保護者の意向に添うことだけが教育相談的対応ではなく、子どもの実態に合った学校や学級を考えることが一番大切なことである。そして、保護者の意向を受け止めながらも、気長に・丁寧に・必要な情報を伝えて就学先を見出していくことが就学に関する相談ではないかと考える。